

派生接辞 *-able* の史的発達の特異性

児 馬 修

1. はじめに

現代英語でとらえられる規則性が、初期の英語にもそのままの形で存在していたと錯覚することは、決して珍しいことではない。例えば、Chaucer の *House of Fame* 1097の中に、agreeable という形容詞（OED ではこの例が初出）がみられるが、動詞の agree もほぼ同時期に（これも *Troilus* 1409が初出例として OED にあがっている）使われていたことがわかる。このような状況で、現代英語で認識されている *-able* 形容詞の規則性、すなわち、agreeable が動詞 agree から派生される形容詞（deverbal adjective）であると即断してよいものであろうか。必ずしもそうはならない。それは、agree も agreeable も英語本来語ではなく、古フランス語（Old French）からの借入語であるからである。すなわち、両単語とも外来語としてそのまま入ってきて使われているだけのことで、動詞に *-able* をつけて形容詞を派生する仕組みが、当時の英語の文法の中に「規則」として確立していたかどうかについてはさまざまな事実を調べたうえでないと決まらないということである。

現代英語における形容詞派生接辞の一つである *-able* が持っているさまざまな性質についてはすでに明らかにされていることも少なくないが（竝木 1987）、それらが歴史的にどのように獲得されたかについては、必ずしも十分な研究がなされてきたとはいえない。さらに、「外国語からの借入」という観点に焦点を置いた研究もあまり知られていない。そこで、本研究では *-able* の史的発達の特異性を示しながら、どこに興味深い問題が潜んでいるのかを明らかにしたい。詳細な通時的事実調査にはまだ多くの時間が必要であるが、本研究においてはさらに、15世紀の資料の一部について簡単な観察・調査を行った。その調査でわかったことは、ノルマン人の征服からほぼ400年余り経過した15世紀ですら、現代英語にみられるような *-able* の「生産性（productivity）」は確認されないということである。さらに、このことは、*-able* という一つの接辞だけの小さな問

題ではなく、外国語のシステムが英語の文法システムに取り入れられる際に見られる諸現象、すなわち、言語（文法）獲得と関わる非常に大きな問題であることを最後に示したい。

2. 現代英語における -able の特徴

最初に、現代英語における派生接辞 -able がもっている三つの基本的な特徴を概観する。

2.1 意味

「～できる」の意味になるものが圧倒的に多い (avoidable = can be avoided)。次に多いのが「～されるべき (punishable = ought to be punished)」と「～に適した (～する価値がある) (readable = worthy of reading)」。その他には、「～しやすい (changeable = liable to change)」もあるが例はわずかである (竝木 (1987: 50))。

2.2 語基（派生の入力）の範疇

他動詞に -able がついて、「～されうる」の受け身の意味になるものが圧倒的に多い。名詞に -able が付く例もあるが数は少ない (peaceable, marriageable, knowledgeable など)。自動詞に -able が付くこともあるが、数はさらに減る (changeable, perishable など)。

2.3 派生語（派生の出力）の範疇

語基に -able が付いて形容詞となる。(valuable(s), variable(s) などは派生形容詞からの転換の例であって、-able には名詞を派生する機能はない。)

2.4 その他の特徴とまとめ

なお, comprehensible, soluble などにみられる -ible, -uble も -able に比べるとずっと少ないが, -able の異綴りと考えてよい。

以上, まとめると, 現代英語における -able は「他動詞に付いて形容詞を新たに造ることのできる, 新造力 (生産性) の強い派生接辞」であるということである。

3. *-able* の史的発達とその特異性

前節では *-able* の基本的な特徴をいくつか概観したが、それらの特徴はいずれも他の派生接辞と比較して何か特異な特徴というわけではない。ところが、*-able* の起源、すなわち、歴史的な発達を踏まえてみると、上では触れなかったいくつかの特異性があることに気づく。その特異性には現在もその痕跡を残すものもあれば、初期にみられるだけの場合もある。それらの特徴を次にみていくことにする。

3.1 *-able* の起源とその史的発達の概観

-able の起源とその発達は *OED* や Marchand (1969) にやや詳しい記述があるので、それらをまず振り返ってみよう。そこでは、詳細な年代は示されていないものの、いくつかの段階を踏んだ発達過程や変化のポイントがやや示唆的に記述されている。

3.1.1 *OED* の記述

時間的な順序は必ずしも明示的とは言えないが、概ね次のような段階を踏んで発達したという記述である。

段階1 OF から直接借入したものだけが使われている時期

段階2 OF 借入語の中ですべてではないが、いくつかについては、例えば agreeable, passable, amendable などで agree-able, pass-able, amend-able のように分析され、この分析 (V-able) を下記のように適用して、新語を派生した時期

- ① OF 借入の語基 V に適用して派生したもの (例は特に示されていない)
- ② 英語本来語の語基 V に適用して派生したもの (bearable, speakable, breakable wearable)

[なお、この段階の拡張で接辞 *-able* とは本来、直接関係していない自由形態素である形容詞 *able* との形態的類似性が関わっている (すなわち、意味的に *eatable* が *able to be eaten* と解釈されるということ) ことが示唆されている。]

段階3 動詞の中で同形の名詞を持つもの (いわゆる転換) があり、それに *-able* が付くような例がある。例えば, *debatable*, *rat(e)-able* のように、N-able とも V-able とも解釈できる

ものである。そこで、新たに名詞を語基とした N-able が登場する時期。たとえば, car-riageable, clubbable, saleable などがもたらされた。⁽¹⁾

段階 4 動詞句に -able がつく時期 (get-at-able, come-at-able)⁽²⁾

段階 5 今日では常に受け身の意味だが、しばしば、昔の意味（能動的意味）で使われているものもある comfortable (= able to comfort), suitable (= able to suit)。したがって、2.4 でみたように、語彙化 (lexicalization) されたものを除くと、生産的に造語できるのは他動詞に限定されるようになった時期。

3.1.2 Marchand (1969) の記述

Marchand (1969) では変化の過程を時間的に順序立てて記述するというよりは、変化のポイントがいくつか示唆されている。

- ① 英語の派生接辞 -able を発達させたのは、次のような OF 借用語 (ME 期における) である。agreeable, comfortable, blamable, comparable, desirable, measurable, damnable, deceiverable, profitable, changeable, favorable, passable, serviceable, reasonable, acceptable, commendable, determinable

[すなわち、上記のような借入語群の中に X-able (X=V or N) という分析が明白であるもの (X も借入語として存在する場合) がふくまれていたということであろう。裏を返せば, possible のようにその分析が不能な借入語も少なからずあったということである。]

- ② 上記 X (派生の語基) が N ないしは V であるという形態的 duality と、意味的に能動、受動があるという意味的 duality はいずれも OF の性質を踏襲したものである。形態的 duality の例については, measure, service, reason は N 語基, accept, agree, change, commend, deceive, desire, pass は V 語基, comfort, profit, favor は N 語基とも, V 語基とも、解釈できる例である。意味の duality の例を挙げると, durable, variable, agreeable, comfortable, deceivable は能動, acceptable, blamable, commendable, comparable, desirable 受動, passable, changeable は能動とも、受動とも解釈できる例である。

- ③ 傾向を言えば、V > A の方が N > A より頻度が高く、さらに、V > A においては受動の意味の方が能動より多い。この性質も OF, L から英語に踏襲された。

- ④ 英語内での派生は14世紀から起こる。借入語が豊富に入ってきたのと同時に起こり、F 借入語に起こる場合と英語本来語に起こる場合とがある。[ロマンス接辞が英語本来語に付くというのは、他に -age, -ard ぐらいで、珍しいので、おそらく、そこには自由形態素である (語源的

には接辞 *-able* とは無関係の) *able* の存在が関連しているという示唆がある。]

F 借入語に起こる例をいくつか初出年順に示すと, *available* 1451, *determinable* 1458, *appeasable* 1549, *alterable* 1574 [能動の意] *approachable* 1571, *controllable* 1576, *countable* 1581 [受動の意], *conquerable* 1599などがある。

英語本来語に起こる例としては *understandable* (Wycliff), *believable* 1382, *eatable* 1483, *readable* 1570, *drinkable* 1611, *breathable* 1731などがある。

- ⑤ X-able より un-X-able の初出が早い例がある。例えば, *unspeakable* の初出が c1400であるのに対し, *speakable* のそれは1483である。同様のことが, *unknowable*, *unthinkable*, *unamendable*, *unbearable*, *unbreakable*, *unaccusable*, *unavoidable*, *unclimbable*, *unconsumable* などにも当てはまる。

3.2 *-able* の歴史にからむ特異性

本節では, 上記 *OED* と Marchand の記述を踏まえて, 2節では触れなかった *-able* の特異性3点を確認したい。そうすることによって, *-able* の史的発達に関して, 今後の史的研究の課題が浮き彫りにされるであろう。

3.2.1 ロマンズ起源の派生接辞としての *-able* の特異性

-able の特殊性の一つは, 同種の派生接辞 *-ful* と比較することによってより鮮明になるかと思われる。*-ful* は, 自由形態素 *full* がすでに OE 期に存在し, 自由形態素を維持したまま, 新たに派生接辞として発達し, 生産的に機能していた。それに対し, *-able* は, 3.1節で指摘されているように, 自由形態素である *able* とは本来, 語源的には「無関係」であり, *-able* が英語の中で生産的な接辞として発達する過程で, 自由形態素 *able* との結びつきが関与したらしい。*able* 自体も OF 借用語であったため, ME では, *Xable* (形容詞) の方が初出が早く, 基体の *X* (動詞) の初出がそれより遅いこともまれではない。それはまさしく *-able* がまだ派生接辞として十分に確立されていなかったことを示唆していると思われる。このように, *-able* と *-ful* は現代英語では同種の派生接辞であっても, 前者が外来形態素 (派生接辞) で, かつ, それと関係する自由形態素自体も外来語であるために, その成立過程は, *-ful* ほど単純ではないのである。

そこで, 問題になるのは, いつごろ, そして, どのように, 外国語から入ってきた接辞が, 英語の中で体系化されたのかという疑問である。前節の記述の中で示唆されているように, 英語の中に体系づけられたことへの一つの証拠として考えられるのは, 英語本来語を語基とした派生語

(X-able) がある程度生産的に造語され始めた事実である。その時期がいつ頃なのかという点をま⁽³⁾ず説明する必要がある。

3.2.2 -able 派生語の音韻的特異性：2種類の -able

-able の史的発達が複雑であることを前節でみたが、現代英語の中だけで見た場合にもその特異性が反映されている興味深い事象が指摘されている。Aronoff (1974) は2種類の -able が存在するという議論をしている。その議論は、接辞には基体の第一強勢の位置を変える接辞（第Ⅰ類）とその位置を変えない接辞（第Ⅱ類）とがあるという、Siegel (1974) 以来の形態論で受け入れられてきた主張に基づくものである。すなわち、Aronoff は興味深いことに -able が第Ⅰ類の接辞であると同時に、第Ⅱ類の接辞でもあると主張している。根拠となる証拠の一例をあげれば、comparable [kámperəbl] の -able はⅠ類で動詞 compare の第一強勢を変えるのに対し、comparable [kámperəbl] の -able はⅡ類であるため、強勢を変えないということになる。このような現代英語における -able の二重性 (duality) はいったい何を意味するのであろうか。特に、歴史的な意味はないのであろうか。2種の強勢パターンがいつごろどのように発生したかについては今後の調査が必要で、現時点で定かではないが、ふつう、第Ⅰ類がロマンス系の接辞 (-ation, -ee, -ity など) で、第Ⅱ類の接辞が英語本来の接辞 (-er, -ful, -ness) にあたるといわれているので、そのことを踏まえると、-able は最初、第Ⅰ類の接辞として機能していたのが、その機能を維持したまま、さらに、第Ⅱ類の接辞として発達（「英語化」）したのではないかという推測が浮かぶ。通時的な過程はさておき、-able がもともとロマンス系接辞であるという性質と同時に、英語の中に取り入れられた（「英語化」された）接辞としての性質をも獲得しているという事実は、起源が外来語であるゆえの二重性を備えているという点で実に興味深い。comparable の二つの発音がいつ頃生じたのかが判明されれば、前述の「英語の中に体系づけられた」ことが実証されるのかもしれないが、その音韻上の変化を知る手掛かりは乏しい。

3.2.3 -able 派生語の統語的特異性

現代英語で -able (-ible) 派生形容詞が名詞を後置修飾することがあるといわれている。Quirk et al. (1985: § 7.21) によると、(1)のように、特に名詞が別の形容詞の最上級や、only, last, next などに修飾されている場合に -able 後置修飾が起こる。

- (1) a) the best use possible
b) the greatest insult imaginable

(6) 立正大学文学部研究紀要 第29号

c) the only actor suitable

この特異性に関する共時的な分析はさておき、歴史的には *-able* 形容詞が OF 借入語に由来することと関係があるのではないかと推察される。中尾 (1972:398) では、中英語でフランス語の模倣によると考えられる後置修飾構造の例が起こると指摘されている。

上で見た二つの特異性は形態論、いわば「語」の中の特異性であるが、ここでは外来語 (OF) 借入に絡む特異性が、一つ上のレベルの統語論にまで及んでいる事実は興味深い。このような後置構造の衰退も、上述の「*-able* が英語の中に体系づけられた」時期と無関係ではないと思われる。

4. 15世紀英語の調査：『パストン家書簡集』における *-able*

前節で提示された *-able* の特異性を踏まえて、それがいつどのように「英語化」されたのかを解明するためには資料調査が必要であるが、14世紀以前についてはいくつか先行研究もあるので、今回は15世紀に書かれた『パストン家書簡集』を資料として取り上げ、簡単な調査を行った。その調査で観察された *-able* 形容詞 (派生語とは限らないことに注意) のすべてを現代英語の綴りで示すと次の(2)のとおり59語である。⁽⁴⁾ (以下には、*-able* 派生語を語基として、さらに接辞をつけて派生される長い派生語も一部含めている。*は現在ほとんど用いられない廃語を示す。異綴りや詳細な統計は別表を参照されたい。)

- (2) abominable, acceptable, agreeable, arable, available, charitable, changeable, chargeable, comfortable, commendable, companionable, credible, conformable, corrigible, *covenable, *conable, customizable, defensible, demandable, doubttable, excusable, favorable, forbearable, forcible, formable, *greeable, honourable, horrible, importable, impossible, importunable, incessable, measurably, interchangeably, intolerable, lamentable, laudably, levyable, inheritable, miserable, movable, mutable, notable, opinable, payable, peaceable, personable, possible, presentable, profitable, reasonable, semblable, unrecurable, returnable, seasonable, vengeable, treatable, *vailable, variable

詳細なデータの整理と分析は未完であるが、とりあえず、3節で提示した特異性という視点に

絞って、上記の例の観察から得られた所見をいくつか以下に述べることにする。まず、3.2.1 節で触れた、この15世紀に -able が「生産的な」英語の派生接辞として確立していたかどうかについてであるが、その確立を支持する証拠は十分に得られなかったという結論である。それは、英語本来語の語基に -able の付いた派生語の例は *forbearable* のたった1語しか見いだせなかったことから明らかである。この種の例は Chaucer (*unknowable*), Wycliff (*understandable*) など14世紀から散見されることは知られている (Jespersen(1942); 寺田(2010)) が、その状況は15世紀においてもそれほど変化はないということである。さらに、残りの OF 借用語58語についてみると、*agreeable*, *demandable*, *doubtable*, *favorable* のように V-able または N-able と分析可能なものも少なくないが、*arable*, *conable*, *mutable*, のように語幹が特定できない、すなわち語幹が動詞や名詞として使われていた十分な証拠がないような例も少なくない。意味についてはまだ詳細に検討していないが、現代英語と異なり、「～できる」の意より、「～しやすい」「～に適した(～に値する)」の意の方が優勢であるような印象を受ける。これはおそらく、自由形態素の *able* の意味がもともと「(物・道具等や人が) 扱いやすい (御しやすい)」「適している、ふさわしい」の意で用いられていたことと関係しているのであろう (*OED able* 参照)。この点は今後さらに調査が必要であるが、意味についても15世紀の -able はまだ現代英語のそれに近づいていないことがわかる。

なお、(2)の語群の意味について、さらに一点顕著な傾向があるのに気付く。それは意味ネットワーク (semantic network) と呼べるような現象が(2)に観察されることである。例えば、(2)の中に *changeable*, *mutable*, *variable* のように「変わりやすい」という同じ意味をもった語群が存在するのである。他にも *agreeable*, *favourable* 「好ましい」、*conable*, *available* 「便利な」、*importunable*, *chargeable* 「やっかいな」、*conformable*, *semblable* 「似ている」、*importable*, *intolerable* 「耐えられない」などがみられる。このような現象は何を意味するのであろうか。それは、おそらく15世紀の頃には、-able が派生接辞として多くの V と結びつくというには程遠く、意味ネットワークを頼りに、OF 借入語の使用拡大と淘汰が行われていたのではなかろうか。実際に、この59語には数個の廃語が確認できる。

次に、3.2.3 節で触れた統語的特異性であるが、これについても今回の調査で、ある程度実証された。(3)(4)の例のようにいくつかの -able 形容詞が前置修飾に加えて、後置修飾の用例も観察されたからである。これらの後置修飾の例は、-able 形容詞がまだ外来語と意識されていたことの表れではないかと考えられる。

(3) arable

a) … occupyeth the maner of Tychewelle ne no part of yt, pastures aswell as herable londz;
(913/9-10)⁽⁵⁾

b) as for the ferme that Cheseman had in Boyton, that is to sey xl acre lond erable. (649/1-2)

(4) semblable

a) as ye wold I shuld and were my deute to do for yow in semblabyll wyse. (514/11)

b) as I shal in case semblable do my labour vnto youre pleasaunce; (533/12-13)

以上の所見から、15世紀における *-able* は、2.4 節でみた現代英語における *-able* の位置づけ、すなわち「他動詞について形容詞を新たに造ることのできる、新造力（生産性）の強い接辞」には程遠く、むしろ多くの *-able* 形容詞はそのまま外来語として意識されて使用されていたのであろうと推測される。したがって、*-able* が接辞として「英語化された」のはもっと遅い時期であって、今後はそれを実証するために、初期近代英語以降の資料の調査研究が必要となろう。

5. 結 び

本稿は一見 *-able* という一つの派生接辞だけに関する考察のように見えるが、実は他の様々な事象とも関わってくる大きな問題がそこに潜んでいるように思われる。それは外国語との接触による母語の文法システムの改変とでも呼ぶべき現象の一つであろうか。すなわち外国語のシステムを母語のシステムに取り込む際に起こる現象の問題ともいえるかと思う。英語史においてはいろいろな外国語の影響で、二つのシステムが併存している例（屈折（*-er*, *-est*）による比較・最上級と分析的なシステム（*more/most* …）による比較・最上級の併存）や、既存の構文に外来語の動詞が適合されない例（二重目的語構文に外来語の *donate*, *contribute* が使えない現象）、既存の動詞の項構造（argument structure）が外来語の動詞に適合されない例（外来語の動詞 *destroy/devour* が *break/eat* とそれぞれ意味が似ているのに、項構造が異なる）などが数多くある。日本語でも同様に、連濁と呼ばれる現象（かさ（傘）→ひがさ（日傘）あまがさ（雨傘））に外来語が適合しない（タンク→*ガスダンク; ケース→*ガラスゲース）ことがある。その意味では、*-able* もまさに外来語から英語の中に生産性の高い接辞として取り込まれた一例なので興味深く、その受容・発達のメカニズムの解明について今後さらなる研究・調査が期待される。

表：『パストン家書簡集』における -able 派生語

1. 表中の太字語は現代英語の綴り (OED の見出し語) を、細字語は原典に検出される異綴りを、示している。
2. 「最短派生語」とは 検出された -able を含む派生語の中で最も短いもので、それより長い派生語がある場合には「より長い派生語 1-3」で示している。(たとえば、① measurable が検出されず、② measurably、③ unmeasurably が検出された場合には②を「最短派生語」に、③を「より長い派生語」に示してある。
3. 特定の綴りで複数例が検出されている場合があるが、表では特にトークン数は示していない。

最短派生語	検出された異綴りリスト	より長い派生語 1	より長い派生語 2	より長い派生語 3
abominable	abhomynable			
acceptable	acceptabell, acceptable			
agreeable	aggreabill, aggreable, agreeable, agreeabyll, a-greabul, a-greabul, a-greable			
arable	arable, erable, herable			
available	available, availeabill, avayleable			
changeable	chaungabyll, chaungeablé	changeably (chaungeably)		
chargeable	chargeabill, chargeable	unchargeable (vnchargeable)		
charitable	charitable, charytable			
comfortable	comffortable, comfortable, comfortabyll, counfortable, confortable	comfortably (comfortably)		
commendable	commendable, comendabyll			
companionable	compenabyll			
conable	conable			
conformable	conformable			
corrigible	corigyble			
covenable	couenable			
credible	credebill, credible, credybell, credyble	credibly (credebly, credibly, credybly, credybilly, credybily)	incredible (encredibill)	
customable	customable	customably (customabely)		
defensible	defensable, defensible	defensibly (defensabyllly, diffensibely)		
demandable	demaundable			
doubtable	doubtable, dowtabill			
excusable	excusable, excuseabyll			
favorable	fauorable, fauourable, favorabil, favorabill, fauowrabil, favorable	favorably (fauorabely, fauorabelye, fauorably, favorably)		
forbearable	forberable			
forcible	forcibille, forcible, forcyble, forsable, forseble, forsebyll, forsibil, forsybyll	forcibly (forsybly)		
formable	formable			
greeable	greable			
honourable	honorable, honorabill, honorable, honorabyll, honourabil, honourabill, honourable, honourabyll, honurable, honurabyll, onorabyll	honorably (honorably, honourably, honourabyle)		
horrible	horebyl, horrible, orible, oribyll, orrible, orybell, oryble, orybyll	horribly (orribly, orubelly)		

importable	importabile, importable, importablé, inportable, jnportable, jmportable			
impossible	impossybyl, jnpossybell, jnpossybyll	impossibility (impossibilité, impossibilité)		
importunable	jnportunabill			
incessable	insessiabyll			
inheritable	inheritable			
interchangeably	enterchaungeably, enterchaungeabully, entierchaungeably			
intolerable	intollerable, yntollerable			
lamentable	lamentabyl			
laudably	laudably			
levyable	levyable			
measurably	mesurably			
miserable	miserable			
movable	mevable, mevabill, mevabyl, mevabyll, meveable, moveabell, moveable	unmovable (on-movable)		
mutable	mutabill			
notable	notabill, notable, notables, notabyll	notably (notably)		
opinable	oppynable			
payable	paiable, payabil, payeable, payable			
peaceable	peasabyll, peaseabyll, peasebill, peasibill, peasible, peasible, peasseblé, peasyblé, peissiblé, pesable, pesebyl, pesibill, pesible, pesyble, pesybyle, pesybyll	peaceably (peaseabyly, peasably, peasebly, pecybily, pesably, pesebely, pesebly, pesibeli, pesibely, pesibilly, pesibily, pesibly, pesybylly)		
personable	personable			
possible	possibill, possible, possibyll, possybell, possyble, possybyll	possibility (possybylyté, poscybylyté)	impossible (impossybyl, jnpossybell, jnpossybyll)	impossibility (impossibilité)
presentable	presentable			
profitable	profetabill, profettabyll, proffitabill, proffitable, profitabill, profitable, profitabyll, profytable, profytabyll, profytabyll, profytabyll, profectabell	unprofitably (onprofitably)		
reasonable	reasonable, reasounable, resenable, resonabell, resonabill, resonable, resonables, resonabull, resonabyll, resonabyll, resounable	reasonably (reasonably, resnably, resonabely, resonabilly, resonablely, resonably, resonabye)	unreasonable (vnreasonable)	unreasonably (vnreasonably, onreasonably)
unrecurable	on-recurabyll			
returnable	retornable, retournabill, retournable, returnable			
seasonable	sesonable			
semblable	semblable, semblabyll			
treatable	treteable			
vailable	vayllable			
variable	variable			
vengeable	vengeable, vengible			

注

- (1) debatable の初例は1581年, ratable は1503年である。それらの分析によってもたらされたとされる carriageable, clubbable (‘sociable’ の意) の初例が³1702年, 1783年なのでこの段階3 はかなり遅い時期の拡張なのであろう。
- (2) get-at-able の初例は1799年, come-at-able は1687年なので, この段階4 もかなり遅い時期の拡張なのであろう。
- (3) 他にも -able の特異性に関して Nagano (2008: § 1.2) は次のような事実を指摘している。ふつう転換 (conversion) によって造られる形に派生接辞は付かないが, enviable は例外で, [[envy]_N]_V + able] と分析される。この特異性が本稿のテーマとどう関係するのかは不明である。
- (4) 59語はタイプ数であり, トークン数ではない。異綴りについては別表参照されたい。
- (5) 括弧内の数字は Davis 版の手紙番号と行を示している。

参考文献

- Aronoff, M. 1974. “-able” *NELS* 5. 183-191.
- Davis, N. (ed.) 1961. 1976. *Paston Letters and Papers in the Fifteenth Century*. Oxford: Clarendon Press.
- Jespersen, O. 1942. *A Modern English Grammar* Part VI. London: George Allen and Unwin.
- Marchand, H. 1969 *The Categories and Types of Present-day English Word Formation: A Synchronic and Diachronic Approach*. Munchen: C. H. Beck.
- Nagano, A. 2008. *Conversion and Back-Formation in English: Toward a Theory of Morpheme-Based Morphology*. Tokyo: Kaitakusha.
- 中尾俊夫 1972. 『英語史Ⅱ (中英語)』東京: 大修館書店.
- 竝木崇康 1987. 「英語の接尾辞 -able」茨城大学教育学部紀要 36. 47-64.
- OED The Oxford English Dictionary*, 2nd ed., on Compact Disc. 1994, Oxford: Oxford University Press.
- Plag, I. 2003. *Word Formation in English*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Quirk et al. (eds.) 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Selkirk, Elisabeth. 1982. *The Syntax of Words*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Siegel, Dorothy. 1974. *Topics in English Morphology*. Ph. D. dissertation. MIT.
- 寺田正義 2010 『言語変容の基礎的研究: 英語準法助動詞 be able to をめぐって』東京: 朝日出版社.
- 米倉綽 2006 『英語の語形成——通時的・共時的研究の現状と課題——』東京: 英潮社.

(2012年10月31日受理, 2012年11月2日採択)